

# 主将の熱さ 高まる士気



## 八尾



朝練では、西浦謙太主将（右奥）ら選手たちが打撃練習に励んでいた。八尾市高町の八尾高校

サッカー部や陸上部が練習する八尾高校のグラウンド

ドで、野球部員たちは輪になって集まっていた。輪の中心には主将の西浦謙太君（3年）がいた。「練習の間があきすぎ。言われないとやれない集団やったら、勝たれへんから」。空気がピリツとした。

八尾 1915年創部。26、59年にかけて、春夏通算10回の甲子園に出場。52年夏は準優勝した。

## 自分を客観視 一つ一つ課題克服

豪校に押され、1959年を最後に甲子園から遠ざかっているが、ここ数年、復活の兆しを見せている。昨夏の南大阪大会では8強、昨秋の近畿大会府予選では16強に入った。

グラウンドが使えるのは週3日、午後7時には完全下校が求められる。厳しい環境のなかでも力を発揮する取り組みが評価され、今春の選抜大会では、近畿地区の21世紀枠候補に選ばれた。長田貴史監督（42）は「もともとまじめな選手が多いが、今年は西浦の存在が大きい。プレー面でも精神面でもチームを引っ張ってくれている」と話す。

新チームが発足した8月以降、チームの練習メニューは西浦君を中心に選手が考えている。長田監督が授業などで練習に出られない日は、西浦君が練習を取り仕切り、ノックもする。

西浦君は大学進学を考えて、勉強と野球が両立できる八尾を選んだ。高校野球の監督を務める父の背中を見て育ち、小さい頃から野球が大好きだった。入学すると、監督から言われるがままではなく、選手一人ひとりが練習や試合で見つけた課題を克服するため、議論し、工夫していた。特に驚いたのは、練習に取り組む際の高い集中力。「中学とは全然違う」と驚いた。そんな先輩たちの姿を見て、かっこいいと思った。

① ②

は「中学のころは自分の得意なことばかり練習していた。今は自分のためにもチームのためにも、課題を一つずつ克服したい」。守備でミスをする、動画サイトで「セカンド スロー練習」で検索し、練習方法や克服するヒントを探す。課題を見つけ、解決策を探り、クリアする。そんな作業に楽しさを感じるようになった。

21世紀枠候補に選ばれても、西浦君は「このまま（選抜大会に）出場できてもコールド負けやぞ」とチームを鼓舞し続けた。惜しくも選抜出場は逃したが、課題だった打力も向上し、春の近畿大会府予選では16強入り。地力を改めて示した。

西浦君の熱意は、他の選手にも伝わる。エースの藤沢丈君（3年）は、自分の打球フォームの動画を撮影して、捕手の西浦君と確認するようになった。ひじの下がりすぎには気を配る。ひじが下がるとボールに力が伝わりきらず、けがの原因にもなる。藤沢君は「なにより、自分を客観視できるようになった」。

一塁手の滝野翔太君（同）

抽選会前日の20日も、選手たちは午前7時から朝練習に励んだ。前日あった試合では好機で1本が出なかったから、みっちり1時間振り込んだ。足元をしつかり見詰め、知恵を絞る、積み重ねた努力は、決して裏切らないと信じている。

（森岡みつほ）